

2023.06.05

孔子・釈迦・老子

儒教は宗教か？

仏陀に死後の世界はない

道教の道



孔子 (世界の偉人)

6月①のごあいさつ
山内公認会計士事務所
2023年6月1日(木)

孔子は、釈迦、キリスト、ソクラテスと並び、世界の四聖人(四聖)に数えられている。

中国春秋時代(BC770年～BC403年)の約1,500年前に魯国で生まれ、周初(BC11世紀)への復古を理想とした。

孔子の教えは、戦国から漢初にかけては、それほど人々の間で振るわなかつたが、前漢・後漢を通じ勢力を伸ばして国教化された。以後儒教は中国思想の根幹たる存在となった。

最初、生国の魯に仕えたが応えられず、諸国を歴遊して治国の道を説くこと二十余年、用いられず帰国して教育と著述に専念する。

孔子の父は、魯の下級武士で齊との戦争で武勲をあげたという。孔子3歳の時父が没し、母の手で育てられ、成年になってから倉庫番や牧場の飼育係をしながら学問を自習したという。

36歳の時、魯の昭公が齊に亡命した時齊に行く。数年間齊にとどまり、43歳の時、孔子は魯に帰る。この頃から子路などの弟子が集まり、孔子の名声が高まる。以後14年間、宋、楚などの諸国を流浪するが、どこへ行っても採用されず69歳でまた魯に帰る。

「詩経」、「書経」を編纂し、「易経」を注釈、「春秋」を創作したと言われる。

「論語」は孔子の死後、その弟子たちが儒家としての孔子の言行録を編んだものである。約3,000人の弟子がおり、「身の六芸に通じる者」として70人、そのうち特に優れた高弟は「孔門十哲」と呼ばれ、徳行、言語、政事、文学に優れていた。孔子の死後、性善説を唱えた「孟子」と性悪説を唱えて礼法による教育を重んじた「荀子」は有名である。

孔子は、乱世を治めるためには、周の初めの制度に復帰すべきだと考えた。

為政者は有徳者でなければならず、法律による厳しい規制よりも、道徳や礼儀による教化こそが理想的な支配の方式だと考える。

孔子の頃の人々は、呪術で神意を伺い、それによって行動するのが常であったが、孔子は人間は良心の命令によって行動すべく、神の意志によって行動すべきではない。神々は、これを尊敬しながらも不可知のものとしてそっとしておけと言う。

ここに思想史上の孔子の画期的な意味がある。



釈迦牟尼 (世界の偉人)

6月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年6月11日(日)

約2500年前、ネパールの南部がインド大平原に連なるあたりにシャカ族という小国があり、その国王の長子として生まれ、80年の生涯を送ったのが釈迦である。

生後3日にして生母を失ったが、王子として教養を積み生活は恵まれていた。

しかし、人生の根源に潜む苦の問題に思いを深め29歳の時、その徹底的な解決を求め城を抜け出し、出家する。

出家した釈迦は有名な仙人たちを相続いで訪ねるが、その意を満たせなかつた。

付近の山林に立てこもって出家者にふさわしい苦行に専念するのがかえつて初志から遠ざかることを自覚する。

それを放棄して、川で身を清め、村の少女から乳粥(ちちがゆ)を受けて体力の回復を待ち、ブッダガヤの菩提樹の下に座って、ひたすらに思索にふけった。

途中に悪魔の誘惑もあったが、ただ一途に瞑想に集中し、ついに大いなる悟りが開けた。

釈迦は、かつて苦行をともにした5人の出家者を訪ねて、最初にその教えを説いた。彼等は教化されて仏弟子となる。

これを契機に、一般の人々にも広く呼びかけ、様々な問い合わせに答えて、説法教化の旅を続けた。

その範囲は、竹林精舎と祇園精舎に夏のモンスーン期を過ごすほかは、ほぼ中印度一帯に及び仏弟子も信者も次第に増加した。

釈迦はインド各地に45年間も教えを説いて回った。

そして、ついにクシナガラの郊外の沙羅双樹の下で入滅する。ときに80歳。

その最後の族における情況は一つの経にまとめられ数々の遺書が残された。

「自己を灯明とし、自己を拠り所として、他のものを拠り所とするなれ」。

釈迦は生きている人間がどうすれば、悩み、苦しみから解放されるかを解き、死後の世界や「あの世」について語ったことはない。死後の世界について問われたとき、「毒の塗った矢が飛んできて身体に突き刺さったとする。その時この矢はどこから飛んできたのだろう、この毒の種類は何だろうか、などと考える前にまずやることがある。それは、すぐに矢を抜くことである」。

これが有名な「毒矢のたとえ」、あの世があるか無いかを考えるのは時間のムダと言っている。

参考：(お釈迦さまの脳科学 苦米地英人 アマゾン、日本大百科全書、百度)



老子 (世界の偉人)

6月③のごあいさつ
山内公認会計士事務所
2023年6月21日(水)

老子は、紀元前5世紀頃の春秋時代に楚(江南省鹿邑)に生まれる。周の王室の図書役人となった。その当時魯から孔子が訪れて、両者は出会い、孔子は老子を龍に例えて、その人物の大きさを評したという。
やがて、周の衰微を見て、隱棲を決意、西方に旅立った。
途中、函谷関で關守りの尹喜の請に応じて、上下二編の書(老子道德経)を著して、更に西方に去ったという。

老子二編は、約5千言から成り、「道德経」とも呼ばれる。
道德経は、「易経」と「論語」と共に、古来中国人に深遠な影響を与えた三大思想書である。
上編が37章、「道」の字で始まるので「道経」、下編が44章、「徳」の字で始まるので「徳経」で、それを合わせた名称である。
儒経の「道德」と違って、宇宙人生の根源とその働きを表す言葉である。意表を突く逆説的な言葉にも特色があって、民間に広く伝えられた。

老子の思想の中心は、成功を勝ち取るための「無為」の「徳」を説き、そのための根拠づけとして「道」を説く。
まず、「道」とは、これを視れども見えず、これを聴けども聞こえずとするような感覚を超えたもので、天地万物の存在に先立って自存するものとする。その言葉は、「道可道、非常道。名可名、非常名。無名天地之始」に現わされている。

最高の徳は、徳にこだわらない。だから真の徳となる。低級な徳は徳にこだわる。だから徳そのものまで失ってしまう。その言葉は、「上徳不徳、是以有徳。下徳不失徳、是以無徳。」である。

老子と莊子を合わせて、道家思想を「老莊思想」と呼ぶ。
しかし、老子と莊子の思想は元々類似性はありながらはつきりした違いがある。
老子は現実的関心が強く、世俗的な成功主義も視野の中にあるが、莊子は現実に捉われない境地がある。

参考：(日本大百科全書、守屋洋著新釈老子、PHP研究所、百度)

「儒教」は、宗教？ 宗教ではない？

中国人の「宗教観」とは？

「中国」がこんなにも存在感を増しているのに、私たち日本人は中国人のことをあまり知りません……。

中国人は何を信じてきたのか？あの国を動かしている根本原理とは何か？

なぜ日本人の「常識」は彼らに通じないのか？

「第23回山本七平賞」作家・石平先生が、「拜金主義」に毒された現代中国人の“心の闇”を解き明しますー。

「世界三大宗教」とはご存知の通り、「キリスト教」「イスラム教」「仏教」の3つを指す。全世界に、キリスト教は20億人、イスラム教は13億人、仏教は3億6000万人の信者がいるとされている。

中国における三大宗教（「三(さん)教(ぎょう)」）とは、「儒教」「仏教」「道教」のことである。

「儒教」は、孔子(こうし)が体系化した思想で、周の時代の「礼」を理想としている。「仁・義・礼・智・信」という5つの徳性(五常)を磨けば、五倫(君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信)が保てると説き、この「五倫五常」が儒教の教えの基本となっている。

キリスト教やイスラム教には神が、仏教には仏という絶対的な存在が君臨しているが、儒教にはそれに値するような絶対的な存在はない(必ずしも、仏は絶対的な存在とは言えないが)。

儒教の創設者である孔子は、「鬼神語らず」という言葉にもあるように、生涯に渡って神も、鬼も語ることはなかった。

また、儒教は死後の世界にもまったく関心がない。儒教には来世という概念がなく、人間は死んだらそれまで。弟子から「人間は死んだらどうなるのか？」と聞かれた孔子は、「生きることさえよくわからないのに、どうして死がわかるというのか」と答えたという。

仏陀も死後の世界を語らなかったが、孔子とはそのニュアンスが微妙に違うように思う。

要するに、儒教にとって死や死後のことはどうでもよく、「現世をどう生きるか」が問題なのである。

「儒教は宗教ではない」とよく言われる所以(ゆえん)がここにある。儒教は宗教としての要素があまりにも欠けているのだ。



では、儒教は私たちに何を教えてくれているのか。儒教は「君子の理想」を説きながら、「理想的な人間はこうあるべき」ということを教えている。

孔子の『論語』では、様々な場面で「親孝行でなければならない」「穏やかでなくてはならない」「友達には誠実であるべきだ」といった、「人間のあるべき姿」について触れられている。

礼儀正しく、智恵者で、円満な人格（信、義、礼、智の徳目）を持っている人。それが儒教の理想とする「君子」なのである。

儒教は「君子たるもの～」といった具合に、理想の人間像を描くことで道徳倫理の規範をつくってきた。

だが、儒教には「教えを実践したらその後、どうなるのか」という「保証」が何もなかった。そうなると、「私は君子になんぞなれないし、なりたくもないから儒教の教えはどうでもいい」という人間が当然のことながら出てくる。古くから実利主義的傾向の強い中国の庶民に儒教はなかなか受け入れられなかった。

さらに儒教を庶民から遠ざけた大きな理由がもうひとつある。それは「科挙制度（一般から有能な人材を登用するシステム）」の登場である。

科挙制度が完成した宋の時代には、儒教の經典が官僚になるための試験に用いられはじめ、清王朝に至るまでの間、歴代王朝の知識人が勉強しているものといえば儒教であった。

道教



道教

ポータル 歴史学/東洋史

道教（どうきょう、拼音: Dàojiào）とは、中国三大宗教（三教、儒教・佛教・道教の三つ）の一つであり、中国の漢民族の固有の宗教。時には外来宗教を除いてその後に残る中国の宗教形式をすべて「道教」の名で呼称する場合もある。

一般には、老子の思想を根本とし、その上に不老長生を求める神仙術や、符籙（おふだ）を用いた呪術・斎醮（亡魂の救済と災厄の除去）・佛教の影響を受けて作られた經典・儀礼など、時代の経過とともに様々な要素が積み重なった宗教とされる^[1]。道教は典型的な多神教であり、その概念規定は確立しておらず、さまざまな要素を含んだ宗教である^[2]。伝説的には、黄帝が開祖で、老子がその教義を述べ、後漢の張陵が教祖となって教団が創設されたと語られることが多い^[2]。

ほかにも、『墨子』の鬼神信仰や、儒教の倫理思想・

中国語

繁体字

道教

簡体字

道教

発音記号

標準中国語

漢語拼音 dào jiào (dao⁴ jiao⁴)

ウェード式 tao⁴ chiao⁴

粵語

イエール粵拼 dou⁶ gaau³

朝鮮語

ハングル

도교

発音記号

RR式 do gyo

MR式 to kyo

ベトナム語

ベトナム語

đạo giáo

道教

道

基礎

道教の歴史・
道・徳・無極・
太極・陰陽・

教義

「道(哲学)」も参照

道教が幅広い内容を含むものであることは古くから指摘されており^[1]、たとえば南朝梁の劉勰が著した『滅惑論』では、道教の3つの要素たる「道教三品」として以下の三点を挙げている^{[4][8]}。

- 上：老子 - 老子の無為や虚柔の思想
- 次：神仙 - 神仙の術
- 下：張陵 - 祭祀や上章（神々への上奏文を燃やす儀式）および符書（お札）の類

また、元の馬端臨が著した『文献通考』の「經籍考」では、道教の内容を五つ挙げている^{[4][8]}。

- 清淨 - 老子・莊子・列子などの清淨無為の思想。
- 煉養 - 内丹などの養生術。
- 服食 - 仙薬を服用し不老長生を図ること（外丹）。
- 符籙 - 符籙（おふだ）を用いた呪術。
- 経典科教 - 仏教に対抗して作られた経典や儀礼で、近世の道士が用いるもの。

これらの説を受けて、『四庫提要』の「道家類」の序文では、道家（道教）は老莊の「清淨自持」を根本とし、その後、神仙家・煉丹術・符籙・斎醮（亡魂を救済したり災厄を除去するために行う）・章呪（神々への上書文や呪術）などが加わっていったという説明がなされている^[8]。

以下、重要な要素ごとに説明を加える。

人物

老子・莊子・
張陵・張角・
魏伯陽・葛洪・許遜・寇謙之・陸修靜・陶弘景・孫思邈・陳摶・五祖七真・王重陽・丘長春・張三丰

宗派

五斗米道・靈寶派・上清派・重玄派・淨明道・全真教・正一教・華山派

聖地

洞天・桃源郷・蓬萊・靈山・仙境・龍宮・福德島

- 表
- 話
- 編
- 歴



[陰陽五行思想](#)・[讖緯思想](#)・[黄老道](#)（黄帝・老子を神仙とみなし崇拜する思想）なども道教を構成する要素として挙げられる^[1]。道教は中国のさまざまな伝統文化の中から生まれており、中国で古くから発達した金属の精鍊技術や医学理論との関係も深い^[3]。

しかし、道教は中国の歴史上の[道家](#)とは別物であり、また「道家の教・道門・道宗・老子の教・老子の学・老教・玄門」などの呼称がある^[4]。

歴史

詳細は「[道教の歴史](#)」を参照

道教は後漢末頃に生まれ、[魏晋南北朝時代](#)を経て成熟し定型化し、隋唐から宋代にかけて隆盛の頂点に至った^[3]。その長い歴史の中で、悪魔祓いや治病息災・占い・[姓名判断](#)・[風水](#)といった巫術や迷信と結びついて社会の下層に浸透し、農民蜂起を引き起こすこともあった^[3]。一方で、社会の上層にも浸透し、[道士](#)が皇帝個人の不老長生の欲求に奉仕したり、皇帝が道教の力を借りて支配を強めることもあった^[3]。また、隠遁生活を送った知識人の精神の拠りどころとなる場合も多い^[3]。こうした醸成された道教とその文化は現代にまで引き継がれ、さまざまな民間風俗を形成している^[3]。

現代、全世界に道教の信徒を自認する人は3000万人ほどおり、[台湾](#)や[東南アジア](#)の[華僑](#)・[華人](#)の間で信仰されている^[5]。また、中国のみならず中国文化の影響下にあった朝鮮半島・東南アジア・日本といった地域では、道教的な文化を多く受容している^[6]。中国本国においては、[五四運動](#)や[日中戦争](#)、また[中国共产党](#)の宗教禁止政策などで下火になったが、近年徐々に復興している^[7]。

[五行](#)・[気](#)・[内丹術](#)・[無為](#)

典籍

[老子道德經](#)・[莊子南華真經](#)・[列子](#)・[參同契](#)・[抱朴子](#)・[黃庭經](#)・[度人經](#)・[清靜經](#)・[雲笈七籤](#)・[道藏](#)

神仙

[三清](#)・[玉皇大帝](#)・[黃帝](#)・[西王母](#)・[七仙女](#)・[八仙](#)・[閻羽](#)・[嫦娥](#)・[媧祖](#)・[鍾馗](#)・[靈公](#)・[電母](#)・[無極五母](#)・[北斗星君](#)・[九天應元雷聲普化天尊](#)・[南斗星君](#)・[北極紫微大帝](#)・[太上道君](#)・[素娥](#)・[南極老人](#)・[五毒將軍](#)・[劉猛將軍](#)・[赤精子](#)・[五瘟使者](#)・[二十四諸天](#)・[二十八天](#)・[寿老人](#)・[太上老人](#)・[嫦娥](#)・[九天玄女](#)・[龍王](#)・[他の神](#)

老子の「道」

老子の誕生を描いた画

「老子」も参照

老子は先秦時代の学者とされるが、その経歴については不明な点が多く、その思想を記した書である『老子道德経』の成立時期もさまざまな説がある^[9]。道教は中国古来の宗教的な諸観念をもとに長い期間を経て醸成されたもので、一人の教祖によって始められたものではないから、老子が道教の教祖であるとはいえない^[9]。

しかし、『老子』に説かれる「道」の概念が道教思想の根本であることは確かである^[9]。道教においては、不老長生を得て

「道」と合一することが究極の理想として掲げられ、道徳の教理を記した書の冒頭には『老子』の「道」または「道徳」について説明がなされるのが通例である^[9]。

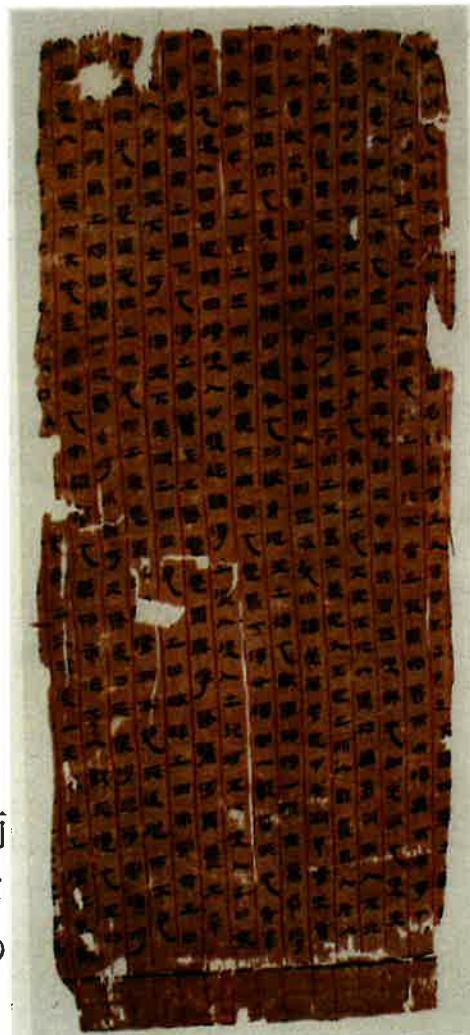
『老子』の冒頭には以下のようにある^[10]。

道の道とすべきは、常の道に非ず。名の名とすべきは、常の名に非ず。名無し、天地の始めには。名有り、万物の母には。故に常に無欲にしてその妙（深遠な根源世界）を観て、常に有欲にしてその徼（明らかな現象世界）を観る。この両者は同じきより出でて名を異にし、同じくこれを玄（奥深い神秘）と謂う。玄のまた玄、衆妙の門。 — 『老子』第一章

none



水牛の上に乗った老子



馬王堆帛書の『老子』

『老子』では、世間で普通に「道」と言われているような道は本当の道ではないとして否定し、目に見える現象世界を超えた根源世界、天地万物が現れた神秘の世界に目を向ける^[10]。「道」は超越的で人間にはとらえがたいものだが、天地万物を生じるという偉大な働きをし、気という形で天地万物の中に普遍的に内在している^[11]。

『老子』に見られる「道」「徳」「柔」「無為」といった思想は、20世紀後半に発掘された馬王堆帛書や郭店楚簡から推測すると、戦国時代後期には知られていたと考えられる^[12]。「道」を世界万物の根源と定める思想もこの頃に発生し、やがて老子の思想と同じ道家という学派で解釈されるようになった^[13]。一方、『老子道德経』の政治理想は、古代の帝王である黄帝が説く無為の政治と結びつきを強め、道家と法家を交えた黄老思想が成立した。前漢時代まで大きく広まり実際の政治にも影響を与えたが^[14]、武帝が儒教を国教とするなど民間に深く浸透するようになった。その過程で老莊思想的原理考究の面が廃れ、黄帝に付随していた神仙的性質が強まっていった。そして老子もまた不老不死の仙人と考えられ、信仰の対象になった^[15]。

道教においては、不老長生を得て「道」と合一することを理想とするが、その際には精神的な悟脱だけを問題とするのではなく、身体的な側面も極めて重視する^[16]。そのため、形而上の「道」の具体的な発現である「氣」もクローズアップされるようになった^[16]。

神仙道

健康で長生きしたいという人々の共通の願いが、永遠の生命を得るという超現実的なところまでふくらませたものが神仙という観念であり、道教では理念的には神仙になることを最終目標としている^[17]。神仙は、東の海の遠くにある蓬萊山や西の果てにある崑崙山に棲み、不老不死などの能力を持っている^[18]。また、戦国時代から漢代にかけては、神仙は羽の生えた人としてイメージされることが多く^[17]、神仙は天へと飛翔する存在とされる^[19]。神仙は、『莊子』においては「真人」「神人」「至人」などとも呼称される^[20]。

外丹

神仙への憧れは様々な伝説を生み、『列仙伝』や『神仙伝』といった仙人の伝承が生まれた^[21]。仙人になるための修行理論や方法は葛洪の『抱朴子』に整理されている^[22]。葛洪は、人は学んで仙人になるとができると主張し、そのための方法として行氣（呼吸法）や導引、守一（身体の一を守り育てること）などを挙げる。葛洪が特に重視するのは「還丹」（硫化水素からなる鉱物を熟して作ったもの）と「金液」（金を液状にしたもの）の服用である^[23]。このように、金石草木を調合して不老不死の薬物を錬成することを「外丹」（練丹術、金丹）と呼ぶ^[24]。葛洪は、神仙になる方法を知りながらも経済的理由で必要な金属や鉱物を入手できないため実践に至らないとも述べている^[25]。

実際には、水銀化合物を含む丹薬は毒薬であり、唐代には丹薬の服用による中毒で死に至った皇帝が何人も出た^[26]。煉丹術の研究は丹砂や鉛といった鉱物に対する科学的知識を多く蓄積し、唐代の道士が煉丹の過程で事故を起こしたことがきっかけとなって火薬の発明に至った。また、道士は中毒死を防ぐために医学について研究したため、漢方医学の発展を促し、煉丹術の成果は医学に吸収されて外科の薬物として用いられている^[27]。

宋代以後は、金丹といった「外物」（自己の身体の外にある物質）の力を借りるのではなく、修練によって自己の体内に丹を作り出すという「内丹」の法が盛んになることとなり、外丹は下火になつた^[26]。

内丹

内丹とは、人間の肉体そのものを一つの反応釜とし、体内の「気」



清代に出版された煉金術の書。

を薬材とみなして、丹薬を体内に作り出そうとするもので、それによって不老長生が実現するとされた瞑想法・身体技法である^[28]。呼吸法には「吐故納新」、瞑想法には五臓を意識して行う「化色五倉の術」、ほかに禹の歩みを真似て様々な効用を求めた「禹歩」などがある^[29]。また、道教においては身体と精神は密接につながっていると考えられるため、感情を調和のとれた穏やかな状態に保つ精神的な修養も不老不死のために必要であるとされた^[28]。

唐代までは外丹が盛んであったが、宋代以後には不老長生法の主流は内丹に移り、『周易參同契』と張伯端の『悟真篇』が内丹の根本經典とされた^[30]。『悟真篇』の内丹法は、「金丹」を体内で練成する段階と、それを体内に巡らせる「金液還丹」の段階に分かれている。前者の段階は、腎臓の部位に感じられる陽気の「真陽」と、心臓の部位に感じられる陰気の「真陰」を交合させると、丹田に金丹が生じるというもの。後者の段階は、体内の金丹を育成し、身体の精氣を金液に変化させる。この時、金液は督脈と任脈のルートに沿って体内を還流し、十ヶ月続けると神仙になる^[30]。ただし、これと同時に心性・精神の修養も必要であるとされ、これは「性命兼修」また「性命双修」と呼ばれのちの全真教で重視された^[30]。

羽化仙と尸解仙

以上のように、道教においてはさまざまな方法によって不老長生の仙人になることが目指されたが、現実には死は避けがたいものであった^[31]。そこで、形の上では死ぬという手続きを経た上で、のちに仙人になるという考え方方が生まれ、これを「尸解」という^[31]。尸解仙の伝説にはさまざまなものがあり、死んだ人が生き返った、棺の中の遺体が消えて服だけになっていた、遺体がセミの抜け殻のように皮だけになっていたといった逸話が語られた^[31]。また、丹薬によって中毒死した場合も、それは本当の死ではなく、尸解仙になったものと考えられた^[27]。

宇宙論

道教における神